The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 金関丈夫と民芸 |
| Author(s) | 林, 承緯 |
| Citation | デザイン理論. 2011, 56, p. 96-97 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/53497 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 金関丈夫と民芸

林　承緯／（台湾）国立台北藝術大学

## １，はじめに

柳宗悦が海外の民芸運動に与えた影響についての研究は，近年来多くの成果が見られる。特に柳宗悦と朝鮮の民芸に関する研究が最も盛んである。これに対し，戦前に朝鮮と同じく日本の統治下にあった台湾の民芸に関する研究は過去に比べ徐々に成果が上がってきてはいるものの，着手されていない研究課題が依然として存在する。柳宗悦が台湾の民芸に初めて触れた時間についての課題もその一つである。また，柳宗悦と台湾との接点は台湾工芸研究者である顔水龍との交流が主であると考えられてきたが，筆者は当時台湾に在住していた人類学者金関丈夫こそが柳を台湾の民芸に導き，並びに柳の民芸論を最も早く台湾に伝えた人物ではないかと考える。本研究は柳宗悦と金関丈夫の交際記録の考察を通じて，柳の台湾民芸に対する興味を高めることに大きな役割を担った金関丈夫の重要性を明らかにする。

## ２，金関丈夫について

金関丈夫という人物は，弥生時代の人骨を発見し，また日本人が混血民族であると主張した体質人類学者であると多くの日本人は認識する。興味深いことに金関がかつて十三年間過ごした台湾では，台湾の体質人類学の創始者であるほか，解剖学や考古学，民俗学などの領域における先駆者の一人としても評価されていることである。金関は一八九七年二月十八日，香川県仲多度郡に生まれた。京都帝国大学医学部卒業後，一九三六年，台北帝国大学教授に任ぜられ，台北市に住む。一九四一年月刊『民俗台湾』を発刊する。一九四三年，柳宗悦来台，案内して台湾を一巡する。一九四九年帰国，九州大学，鳥取大学，帝塚山大学などに勤め，日本国内において人類学調査をする。

## ３，金関丈夫と柳宗悦

金関丈夫と柳宗悦が初めて接触した時期は，これまで多くの研究では一九四三年三月で，柳が東洋美術国際研究会と日本民藝館の委託を受け，台湾で生活用具の調査活動をおこなった時とされている。柳は約一ケ月の滞在期間中，系統的に台湾における主な民芸の産地を訪れたが，もし金関丈夫や画家立石鉄臣など現地に住む人々の協力がなければ，このように順調に各地をまわることはできなかったであろう。上の金関と柳が初めて接触した時期に対し，柳宗悦全集に収録されている柳の私的な書簡を根拠とすると，遅くとも一九三五年七月であるとことが明らかであり，金関が正式に台湾に赴任する以前に二人はすでに接触していたことになる。「（前略）小生の方でおしらせする事は宿願であった民芸館がいよいよ設立される事となり，まもなく起工の運びになる事です，（中略）この美術館を通して色々と今後仕事を致すつもりです。貴兄の御援助を期待します。欧州各国の民藝運動の記事ぜひぜひ送りください[1]。」この書簡から金関と柳の密接な交友関係が浮き彫りになるだけでなく，金関の民芸に対する関心は一九三五年以前からであると推測することができる。

一九四三年三月に柳宗悦が台湾において実

施した民芸調査の動機について，池田敏雄が柳の訪台の裏に金関の存在があったことを明らかにしている[2]。「柳は一九四三年三月中旬から約一カ月にわたって，戦時下の台湾を訪れている。柳を招いたのは総督府の文教局だが，かげでその実現に尽力されたのは金関先生である。これまで粗末に扱われてきた台湾在来の工芸品を見直し，その中から用と美にかなったものを選びだして展示しようというのがねらいであったと思う[3]。」このほか，金関と柳の間の交わりについて「柳宗悦に魅せられたのは，金関丈夫先生の影響が大きい。金関先生は…民芸運動を通して柳とも親交があった[4]。」と述べている。

## 4，金関丈夫の民芸の道

『民俗台湾』は台湾の民俗を紹介する初の月刊誌で，一九四一年七月創刊から，一九四五年一月の停刊に至るまで，計43号が発行された。金関丈夫はこの雑誌の発起人であるだけでなく，池田敏雄の協力のもと雑誌の主な内容や形式を企画した[5]。『民俗台湾』の中で民芸にもっとも関連性があるのは金関が連載したコラム「民芸解説」で，創刊号から金関による文章と写真家松山虔三による写真がセットになり，陶枕，染付鉢，燭臺などの民芸品を紹介し，文章と写真が合わさることで民芸の特質や美感を大衆に啓発しようと試みるものであり，これが台湾におけるもっとも早い民芸啓蒙運動である。

金関丈夫が「民芸解説」の中で用いた実際の図像と文字を組み合わせた解説方式は当時の関連書籍ではあまり見られない。これは柳宗悦が1928年に出版した『工芸の道』以来，柳が民芸思想を広めるために最も多用した方式で，『工芸の道』や『工芸文化』などの著作や二十年以上もの長期にわたって雑誌『工芸』で採用されており，柳がいかにこの方式を重要視していたかが明白である。一方，金関が『民俗台湾』で担当した「民芸解説」は，金関が解説を執筆するだけでなく題材の選択や民芸品の写真にいたるまで金関主導でおこなわれ，柳が民芸に関する刊行物のなかで用いた方式に極めて酷似している。このほか，柳が民芸の特質として挙げた実用，簡素，廉価，無心などが金関の「民芸解説」でもたびたび出現しており，柳宗悦が金関丈夫に与えた影響の大きさがここからも見て取ることができる。

## 5，終わりに

本研究は時代背景と関連資料の分析をつうじて金関丈夫と柳宗悦の間の密接な交友関係をつまびらかにした。金関との接点が1943年に柳が訪台するきっかけとなった。柳の訪台は官民の台湾民芸に対する見方をあらためさせ，間接的に台湾民芸運動の胎動を生じさせることとなった。金関丈夫による民芸研究は雑誌『民俗台湾』のコラム「民芸解説」の執筆のみならず，戦後に「民芸の美」という文を発表している。金関は「民芸の美」のなかで「われわれは直接間接に，みな柳の弟子である。柳は実にあくことなく求め，残すことなく述べ尽くしている。それで，ものをいえばみな柳のエピゴーネンになる。」と述べており，金関が柳の民芸思想の影響を少なからず受けたのは疑う余地がない。

1　『柳宗悦全集』第二十一巻中，筑摩書房，一九八〇，六一－六二頁
2　末成道男編『池田敏雄台灣民俗著作集』綠蔭書房，二〇〇三，四四九頁
3　池田敏雄「柳宗悦と柳田国男の不親切 ── 民芸と民俗をめぐって」『民芸手帖』，一九八〇年一月号，三－十頁
4　池田前掲書，一頁
5　林莊生「《民俗台灣》與金關丈夫 ── 五十年後的讀感」『台灣風物』四五（一），三三－三四頁